

# チャムの古伝承における ポー・モハマッとポー・アリー

——「ダムナイ・アワール・アヒエール」,  
「ダムナイ・ポー・アリー」を事例として——

吉本 康子

キーワード：チャム，古伝承，ポー・モハマッ，ポー・アリー，ベトナム，イスラーム

## 1. はじめに

本稿は、ベトナム中南部のチャム社会で伝承されている物語の内容を訳出して紹介し、イスラーム的な要素についてのチャム側の認識について若干の考察を試みるものである。ここで取り上げるのは、2018年に刊行されたサカヤ編著『チャムのサカライ (sakkarai) とダムナイ (đamnây)』(Sakaya 2018) 所収の37編のうち、「ダムナイ・ポー・アリー (đamnây Po Ali)」と「ダムナイ・アワール・アヒエール (đamnây Awal Ahier)」の2編で、それぞれ、「ポー・アリー」と「ポー・モハマッ」が主要な登場者となっている。ここでの「ポー」とは、神々や目上の者の総称、ないし、それらの名称の前に置く敬称として用いるチャム語で、モハマッはムハンマドの転訛である。つまり、いずれの物語にもアラビア語由来の名を持つ人物が登場するのである。

筆者は以前、『ベトナムにおけるチャム文書目録』(Thành 2007) に掲載されているチャム文書にアラビア語由来の神や人物の名を冠した物語が含まれていることを指摘し、例として「ポー・アロワツの伝説」、「ポー・ナビーを招く儀式」、「バラモン教徒と回教徒に対するポー・ナビ・モハマッの伝説」があることを紹

介した(吉本 2013: 299-300)。アロワツやモハマッなど、アラーやムハンマドに由来する名を冠した登場者がチャム語の文書の中でどのように描かれているのか、本来は原文を読み、内容についても知りたいところであった。しかしながら、筆者はそれらの文書の原本を入手しておらず、物語の具体的な内容についても未確認であった。

本稿で参考にした『チャムのサカライとダムナイ』は、前述の目録に掲載されたチャム文書に記されたものと同じあるいは類似の表題を含む物語の内容を、チャム語とベトナム語の二言語で紹介している。例えば同書には、筆者が旧稿で「ポー・アロワツの伝説」と訳したサカライ・ポー・アロワツ (Sakkarai Po Uw Luah) や、旧稿には挙げていないが、先の目録に頻出するサカライ・ポー・クツ (Sakkarai Po Kuk)、そして本稿で紹介する「ダムナイ・ポー・アリー」と「ダムナイ・アワール・アヒエール」といった物語が掲載されており、それらの中には、アラー、ムハンマド、アリー、ファティマなどが由来と考えられる名の神々や聖人が登場している。

以上のように、旧稿を執筆する際には実現できていなかったイスラーム的な要素を含むチャムの伝承の内容を紹介する本稿は、旧稿の続編

という位置付けにある。

なお、訳出に関しては以下の問題点を述べておきたい。写本をはじめ、在地で継承されている文書に記されたチャム文字の原文は、話し言葉として日常的に用いられる「単音節化」した口語チャム語とは異なる、チャム語の原語で書かれているものが多くを占める。それらの原語には、専門的なものも含め、チャム語ネイティブ話者であっても意味を推察することが難しい用語が含まれており、さらに、その原文は句読点や段落で明確に区切られているわけではなく、単語間の切れ目を認識することも容易ではない。こうしたチャム文字チャム語原文の解説は、現在の筆者の能力を超えている。

『チャムのサカライとダムナイ』に掲載されている物語はすべてチャム文字アカル・トラ（Akhar Thrah）表記のチャム語原文で記されているが、それらはタイプ打ちされたもので、単語の間のスペースと文の区切りを示す読点と終わりを示す句点なども記されており、写本などの原文に比べると読みやすくなっている。とはいえ、段落は区切られておらず、一人称が主語の会話文とそれ以外の文章が混在し、辞書を用いても意味を把握することが難しい用語も含まれているため、筆者には解説できない箇所も多くある。そのため筆者は、内容の意味把握や段落の区切りに関しては、チャム文字原文の後に併記されているベトナム語訳も参照した。ただし、ベトナム語訳の文章には、読みやすさを重視したと考えられる、原文の忠実な逐語訳ではない箇所も認められるので、そうした箇所については、出来る限り原文に沿って訳すようにした他、次のような配慮を心がけた。まず、現地語独自の概念などについては、チャム語原文の発音に近い音をカナ表記で記し、初出のみローマ字チャム語を併記した。さらに、そうした現地語の概念を含め、チャム語原文にも現れない情報などについても注釈や（ ）の中に記すなど、本稿では可能な限り意味を補うようにした。また、訳出する際は部分的に省略したり、

意識した箇所もある。

なお、本稿におけるローマ字チャム語表記は概ねサカヤ編『チャム・ベトナム語・英語辞典』（Sakaya 2014, 2017）に従っているが、辞典に載っていない単語に関しては、サカヤと新江によるチャム語テキスト（Sakaya, 新江 2014）を参考に、フランス極東学院方式の表記を用いている。

本稿は、サカヤ氏の協力、ご教示がなければ完成しなかった。ここに、心から感謝申し上げます。

## 2. ダムナイについて

『チャムのサカライとダムナイ』の著者サカヤは、「ダムナイ」と呼ばれるチャムの古伝承のジャンルを、2つの形態に大別している。一つは、日常的な場で読んだり語ったりされる散文として継承されるもので、もう一つは、宗教的な職能を有する人々、すなわち、ラバップと呼ばれる弦楽器の弾き手であるカタル（khadar）、そして、パラヌンと呼ばれる太鼓を演奏するムトゥン（maduon）によって、神々や村の守護神を祀る宗教施設タノツ（danaok）やピモン（bimong）における儀礼や、カジャン（kajang）と呼ばれる儀礼小屋で行われるリジャ儀礼の時に朗読される韻文詩である。このうち前者は、地名、風俗習慣、信仰、宗教、歴史的な英雄などについて伝える内容のものが多く、後者は主に歴史的な英雄についての話に限定されているという（Sakaya 2018: 20-28）。

ダムナイ作成の起源についてははっきりしない。また、サカヤはダムナイという用語の英訳に legend、ベトナム語訳に truyền thuyết（「伝説」という漢字のローマ字ベトナム語）の語を当てているが、本稿では日本語に訳さず、現地語の発音に近いダムナイと記すことにしたい。

以下の各節で紹介する2編のダムナイは、いずれも散文である。最初に紹介する「ダムナイ・ポー・アリー」は、『チャムのサカライとダムナイ』の136頁から148頁に、2番目に紹介する

「ダムナイ・アワール・アヒエール」は同書の149頁から154頁にそれぞれ掲載されている。これらの原文の底本は、サカヤ氏が収集、所蔵する文書の一部で、前者はニントゥアン省ニンフック県ミーギエツ村在住のLam Gia Tinh氏所有学習ノートに筆写されたものである(Sakaya 2018:444)。後者は、ファンラン・チャム文化センター附属図書室書庫に収められたムーセイ・コレクションの中の文書である(Sakaya 2018:445)。

先に見たように、本稿で紹介する2編の物語には幾つかのヴァージョンがあると考えられるが、底本の来歴、異本との異同、物語の創作時期などについて筆者は調査できておらず、本稿で参考にしたサカヤ版の本文も、異本と照合して書かれたものではない。従って、厳密な校訂作業は今後も必要な課題であろう。ひとまず現時点では、在地に残るローカルな文書にアラビア語由来の神や人物がどのように描かれているのかを知る手がかりの一部として、2編の内容を以下で紹介したい。

### 2-1. 「ダムナイ・ポー・アリー」

ポー・アリーは、そのターン・ムキ (sang magik)<sup>(1)</sup> で行う礼拝 (ngap wak) を生徒 (anak saih) に教える師 (gru) であった。ポー・アリーはそのターン・ムキのイマームであった (danaok imam)。(そのターン・ムキにいた) 正直な一人のアチャル (acar)<sup>(2)</sup> は、祈祷 (da-a) を学んでも唱えることができず、文字も覚えられずにいた。幾人もの若いアチャルが幾度も (正直なアチャルに) 指図した (di pandar)。どこに行っても、幾人もの若いアチャルが礼拝用の帽子 (kalah) を運ぶよう (正直なアチャルに) 指図した。その (正直な) アチャルは既に年長者であった。

(正直なアチャルの) 妻と子は、食事を (ターン・ムキに) 運びに行く度にそうした様子を見て、心の中で恥ずかしく思っていた<sup>(3)</sup>。私の夫はアチャルになって2, 3年経つのに、カティツ



写真1 ターン・ムキに食事を運ぶアチャルの妻

ブ (katip) もムティン (mâdin) も (夫を) 昇級させてくれない<sup>(4)</sup>。祈祷を学んでも他の人のように習得できない。私たちの子どものような歳の若いアチャルに命令されてばかりいる。私はとても恥ずかしい。妻は夫に「あなた、ターン・ムキで座って朗唱 (daok ek) できるようになるまでたくさんの文字を習得しに行ってください。(あなたが) あのターン・ムキで座って朗唱し、幾人もの若いアチャルに指図できるようになるまで、私はもう食事を運ばない。あの若いアチャルたちの前でとても恥ずかしい」と言った。

夫である正直なアチャルも、「他の場所を探して学ぶ (magru) だなんて、私はもう疲れているのに」と言った。

妻も、「探しに行きなさい。もし見つからなくても、家に帰って来れば良いだけ。有能な師は探せばきっといる」と言った。

二人が相談し終わると、妻は、米、キンマと檳榔樹、3房のバナナを入れた籠 (aciet) を用

意した。夫はその籠を肩に担いで半日進んだところで、ある人に出くわした。(正直な) アチャルは(その人に)文字を教える師の家(sang gru pataow bac akhar)があるか尋ねた。その人は、「少し進んだら、生徒に文字を教える建てたばかりの師の家がある」と言った。この人は、ある聖人(po nabi)が(正直な)アチャルを家に導くために立てた使者(tangin takai)であった。

(正直な)アチャルはポー・ラト・ラツ(Po ratho lak)の家に直行した。ポー・ラト・ラツが何の用で来たのか尋ねた。アチャルは言った。「私はアチャルになって3年経ちますが、文字が読めず、祈祷を学んで(bac da-a)も言うことができず、自分の子どものように若いアチャルたちから彼らに代わって働くよう指図されるので、妻が恥じて私に師を探しに行かせたのです」。聞き終えて師は言った。「もしお前(seh)が勉強するつもりなら、師に儀礼用の捧げ物(kaya)を持ってきたか」。それからアチャルが(妻が用意してくれた)籠を開けてバナナを取り出し師に献上すると、師はバナナを妻に持って帰るようアチャルに命じ、師の元に妻を連れて来れば(文字を)教えると述べた。

その(正直な)アチャルはバナナを籠に入れ直して家に帰り、妻に一部始終を話した。妻は何も答えず、(夫である)アチャルも仕方なく妻を師に会わせることにした。それからアチャルが籠を開けるとバナナが2本なくなっていた。アチャルは「師は食べていない。私も食べていない。なぜバナナが2本なくなったのか」と不思議に思った。

妻は何が起きているのかわからなかったが、夫とともに師の家に行った。(師の)家に着くと、師はアチャルの妻に「お前の夫は私のところで文字を学びたいそうだが、お前は私の要求に応じることができるか」と尋ねた。アチャルの妻は「夫に文字と祈祷を教えてくださいるのであれば、師に何をされても私は止むを得ず応じます」と答えた。

アチャルの妻がそう言ったので、その夜、師、すなわち、ポー・ラト・ラツはアチャルの妻を師の部屋に、アチャルは外に寝かせた。三晩そのように寝かせたが、師の部屋では師とアチャルの妻は別々に寝た。ただ、師は呪術を使って(creng sunau)アチャルの妻が横たわる寝台にまるで二人が交わっているようなきしむ音を出させた。

三晩が過ぎ、師は妻が夫に対して誠意があることを、また、夫も師に対して忠誠心(kalaoh hatai)があることを確認した。それから師はアチャルの妻をようやく家に帰した。(正直な)アチャルは(師の家に)残り、それからポー・ラト・ラツは貝葉(hala gal)の上に一文字ずつ字を書き、ろうそくを立てて火を取り、香木を炊き(cuh gahlau)、文字に呪術をかけて(da-a sunuw)ろうそくの先で燃やし、水と混ぜてアチャルに飲ませて、彼に呪術を教えた。それからというもの、アチャルは文字、唱えること(kamruai)、言葉(panuec)を直ぐに習得した。礼拝(ngap wak)の時の言葉(panuec)も完全に唱えた。こうして、ポー・ラト・ラツはアチャルをターン・ムキの礼拝に帰した。

(正直な)アチャルはターン・ムキに戻って自分の座るべき位置に座った。礼拝用の水(aia kakuh)を取るとき、全てのアチャル、イマーム(imum)、カティップ(katip)、ムティン(madin)は、以前のように彼に指図した。彼はそれに従わず、自分から先に水を取り、礼拝を主導するイマームの位置(danaok imum)について。イマームが礼拝用の水を取り終えると自分の位置にそのアチャルが座っていたので彼を追い払ったが、彼は動かず、他のアチャルたちが引っ張っても彼はわずかに体を動かすだけだった。

イマームとカティップは、礼拝を主導するイマームの位置を陣取った(正直な)アチャルの無礼についてポー・アリーに上申した。それからポー・アリーが来て追い払ったが彼はやはり退かなかつた。ポー・アリーが叩いて蹴飛ばしても、彼の体は踏み石のように硬く、わずかに

体を動かすだけであった。ポー・アリーが神の杖 (gai jru) で叩いても何も変わらなかった<sup>(5)</sup>。ポー・アリーは怒って、イマームの代わりに礼拝を主導して全て読誦するよう彼に命じた。(アチャルは) 右側のイマームの位置に座って礼拝した。ポー・アリーがどの動作を命じて、どのテキスト (phun) を命じて、(正直な) アチャルは全てのテキストを、流暢に、祈祷した (pucc sunau)。

ポー・アリーが言うことをそのアチャルは全てこなした。ポー・アリーは腹の中で恥じた。このターン・ムキでは、他のアチャルに風習 (adat) や祈祷を教えることができるのは自分一人であったのが、かつて出来の悪かったアチャルが、どこで、どの師に学んだのか、意図したことを行うのに長けており (sunit thit), もはや自分のことを少しも恐れていない、と。ポー・アリーは忸怩たる思いで、彼よりも優れようと師を探しに行くことにした。師を探しに行く途中、ポー・アリーも道を案内する者に遭遇し、教を請うため師の家に直行した。

ポー・アリーは東方 (harei tagok) へまっすぐに進み、文字を教える師の家を見つけた。そこで会ったポー・ラト・ラッコそ、あの出来の悪いアチャルに文字を教えた者で、正に、ポー・アリーの妻の父 (suma) であった。このことを知って、ポー・アリーは妻の父に「私はあなたの婿 (matau) ですが、あなたはなぜ、あの愚かなアチャルが私に遠慮する必要がなくなるまで、彼に教えたのですか。私はいまここに学びに来たので、あのアチャルよりも優れた者になるまで教えてもらえますか」と尋ねた。

ポー・ラト・ラツは「お前が学びたいのであれば教えるが、そのためには家に帰り、私にお前の妻を会わせなさい」と答えた。ポー・アリーは「もし師が教えてくださるのなら私は勉強しますが、あなたに会わせるために妻を連れてくるのは難しい。師は弟子に教えることはできるが、(弟子にその) 妻を捧げるよう申し付けることはできません」と答えた。ポー・ラト・ラツ

は「妻を連れてこないというのならそれでも良い。私は教えない」と答えた。ポー・アリーは「教えてくれないのであれば、それで結構だ」と答えた。

ポー・アリーは師に弟子として受け入れてもらえなかったため、出来の悪かったアチャルに対して示しが付かないと考え、ターン・ムキには戻らなかった。彼はマカツ (makah) のターン・ムキに向かった。

ポー・ラト・ラツも天 (suer) に戻ったが、戻ると彼の宮廷 (madhir) は粉々に粉砕されていた。

ポー・アリーが自らをマカツに導こうとしている道中、足を躓いて担いでいた2つの瓢箪の油を全てこぼしてしまい、座り込んで泣いているユアン (yuen) の娘に出くわした<sup>(6)</sup>。ポー・アリーが尋ね、娘が答えた。「うちには母と娘の私二人しかいません。私は母を養うため、バニの人 (bani) のためにこの油を担いで働かねばなりません。それが今、油を全てこぼしてしまいましたので、母のために何を売って良いのかわかりません。」

ポー・アリーは娘に「私がお前を助けよう」と言い、つぶやきながら足踏みをして大地に降りると、油が浮かび上がり、娘は元のように二つの瓢箪がいっぱいになるまで油を注いだ。ポー・アリーが油を踏み投げてユアンの娘の腹に命中させ、娘は油を担いで家に帰った。3、4ヶ月後に娘は男の子を生んだ。その子が大きくなって、外に遊びに行くと、友達は彼を不当に扱い、父無し子と大声で罵った。男の子は怒って家に帰り、母に「僕のお父さんはどこ？」と尋ねた。母親は、事の始まりから全てを話して聞かせた。

一方、ポー・アリーは、アカフィエールの国 (nagar akaphier) に辿り着き、村に入って水を請い、水を飲ませてくれた娘に指輪のお返しをした。ポー・アリーが飲み終えた柄杓の中の残り水をその娘が飲んだところ、3、4ヶ月後に、その娘も身籠り、男の子を生んだ。その子が大

きくなって遊びに行くと、やはり友達たちから父無し子と罵られた。その子も家に帰って母に「僕のお父さんはどこ？」と尋ねた。その子の母親も全てを話して聞かせた。男の子は母に別れを告げて父を探しに行った。マカツのターン・ムキに到着し、父に会った。父は（この）アカフィエールの息子をパニにした (tama bani)。

一方、同じく父を探しに行ったユアンの息子は、人々が礼拝の前の浄めをする (ricaow) 井戸に出くわし、その蓋に呪文を念じる (da-a kadha sunau) と、蓋は盤石のように硬くなった。娘たちは儀礼用の水を掬おうとしたが、蓋をあけることができなかった。娘たちはポー・アリーに告げ口した。ポー・アリーは怒って井戸のところまでやってきて、彼を罵った。

母親がユアンだったので、その息子はパニになれなかった。

人々はユアンの子を野蛮な輩とみなしていた。ユアンの息子は恥ずかしく思いながらターン・ムキを出て、それをめちゃくちゃにした。そこで、ナビ (nabi) たちがポー・アリーのアスラム (asulam) の二人の息子に、ポー・アリーのユアンの息子を打ち負かすように言った。二人の息子の名は、ニ・タン (Nyi Than) とニ・タイ (Nyi Thai) といった。彼らはユアンの息子が戻ってこられないように攻撃した。ユアンの息子はニ・タンの片方の肩を切り落とし、アンロアン (Anroang) の民にこれを保存させた。ニ・タンは呪文を使って (ngap sunau) 切り落とされた肩を取り戻し、ニ・タイが呪文を唱えて (da-a sunau) それを元どおりにくっつけた。聖人たちはその様子を見て、ユアンの息子と呼び、和解させた。聖人たちはユアンの息子を王 (patao) にし、チツ・レンガ (Cit Lengka) という名を与えた。平穏になった。

しかし、息子たちは再び戦った。ナビたちはチツ・レンガをアスラムにしなかった (tama asulam)。彼はここを出てどこかに去ってしまった。道が分かれているところで誰かが横切った

ら、それはその国の故郷の王の民である。

## 2-2. 「ダムナイ・アワール・アヒエール」

その昔、大地 (tanah riya) と人間 (anak adam) が誕生した時、ポー・ナビ (po nabi) は一人の男 (sa likei) と一人の女 (sa kumei) をつくり (nah caik), アスラムを授け (blaoh asulam), 呪術を学ぶために別の世界/あの世 (sak tik) に行かせた。ポー・パセツ (po bisch) の側に属す (gah) アヒエール (ahiel/ahier) は男で、ポー・デビタ・スエル (po desbata thuer) を祀った (duh)<sup>(7)</sup>。ポー・アチャル (po acar) の側に属すアワル (awal) は女で、ポー・アロワツ (po uwluah) のターン・ムキを建てた。双方は呪術を学んだ (bac sunauw)。男の側のポー・パセツは、呪文を勉強し流暢に読むことができた。一方、女の側のポー・アチャルは、学ぶのが遅く、まだ流暢ではなかった。両者が12年近く学んだところで、師 (po gru) は彼らを(地上の)家に帰って休ませた。それからポー・ナビ・モハマツ (po nabi mohammad) が地上に降り、アワルとアヒエールの人々の態度を観察した。

ある日、パセツたちは、道の真ん中で死んだ人に出くわした。彼らは遺体の臭いに耐えられず、足を止めずに、ただ眺めてそのまま行ってしまった。

一方、アチャルたちは、道に横たわる死んだ人の遺体を見て、異臭が漂いなか立ち止まって話し合い、このような運の悪い人は放っておく訳にはいかないので、その人に幸福が訪れるようにと善い行いをすることにした。話し合いが終わり、アチャルは死体を浄める水と埋葬するための布を探す手立てを考えた。アチャルの一行はとても遠くまで水を探しに行き、疲れ果てていたが、幸運にも霧のように水が吹き上がる洞穴の入り口に、一匹のトカゲが張り付いているのを見た。それから二人のアチャルが水を土瓶入れて運び、死体を浄めた。アチャルはまた話し合い、遺体をこのまま乾燥させるわけには

いかないので、神に許しを乞うて、自分たちの頭に巻いている布で遺体を包んだ。彼らは遺体を担いで埋葬する場所を探した。道中に豚がいた。その豚は長らく修行に励んで、人に化けることもできたのであるが、まだ豚のままだった。豚は遺体を運ぶ人を見て穴を譲った。アチャルたちは豚が掘った穴まで行って遺体を埋葬した。しかし穴は浅すぎて遺体を埋葬できなかった。アチャルたちはさらに掘ったが、なかなか埋葬できなかった。どうすればよいか考えていたところ、ひとりのアチャルが近くに竹を見つけて喜んだ。アチャルたちは竹を折り、竹を使って穴を掘り続けた。そうして穴を掘り終わると、無事に遺体を埋葬できた。それからアチャルたちは家に帰って、別の世界で再び学ぶ日が始まるまで休んだ。学ぶ日が始まり、ポー・アチャルとポー・パセツたちはポー・ナビ・モハマツに会った。

ポー・ナビ・モハマツはすぐに「お前たちは道中、何かを見たか」と尋ねた。パセツは「私たちは何も見ていません」と告げた。ポー・ナビ・モハマツは続いてアチャルに「お前たちは何かを見たか」と尋ねた。アチャルはかしこまって、「私たちは道に横たわる遺体を見ました。師よ、とても可哀想でした」と答えた。ポー・ナビ・モハマツは続いて「それを見て、お前たちはどうしたのだ」と尋ねた。アチャルは、自分たちが行ったことを話した。

アチャルの話を聞いて、ポー・ナビ・モハマツは「お前たちはトカゲのお陰で水を得、豚のお陰で穴を見つけ、竹のお陰で善行をなすことができた。そのことを忘れないように、これからはトカゲや豚の肉を食べず、どこに行くにも竹を持っていくように」と言った。

このようなことから、アチャルたちはいつも竹の杖 (gai kuyau) を持って歩くようになった。一方、遺体に背を向けたパセツたちは、異臭がともなう火葬を風習とするようポー・ナビ・モハマツに命じられた。また、チャム・バラモンたちが風習とする牛食のタブーも、死後、祖先



写真2 アチャル



写真3 パセツ (撮影: Sakaya)

のいるところ (nagar muk sukei) に行くためにカオパル川 (kraong khao phel) を渡してくれるカピル牛 (limaow kapil) を敬する行為として、ポー・ナビ・モハマツから命じられたと書かれている。

#### 4. おわりに

最後に、上で紹介した物語の内容を通して、イスラーム的な要素についてのチャム側の認識等について若干の考察を試みたい。

まず、「ダムナイ・ポー・アリー」の中におけるポー・アリーは、アチャルたちに文字を教える師としての立場にあり、呪術に長けたイマームであると同時に、変貌を遂げた弟子に嫉妬し、師である義理の父に対しても怯むことのない人物として描かれる。さらに、彼はバニ、アサラム (イスラーム) の父であると同時に、ユアン、すなわちキンの娘との間に誕生した男子 (後に王となる) の父としても登場する。つまり、この話に描かれたポー・アリーは、文字と儀礼を教える師であり、呪力の持ち主であり、イスラームとのつながりを持つ人物であると同時に、異教徒の王の父である。

「ダムナイ・アワール・アヒエール」の中では、ポー・ナビ・モハマツが、アチャルとパセツの師として登場する。彼は善い行いをしたアチャルと、しなかったパセツの両方に進言するのであるが、それぞれの進言は、現在もチャム・バニとチャム・バラモンのそれぞれの風習として実践されている。つまり、ポー・ナビ・モハマツは、チャム・バニだけでなく、チャム・バラモンの宗教実践にも関わる人物として、この話の中では描かれているのである。

いずれの物語も、アリー、ムハンマドというアラブ由来の名を持つ人物が重要な役割を遂げている。ベトナム中南部に残るチャムの古伝承には、これらの物語のように、チャム社会におけるイスラーム受容の認識を知る上で重要な資料が他にも存在する。これらはまた、チャンパのイスラーム受容をめぐる歴史学的な問題を

解明する貴重な手がかりでもある。例えば、本稿で紹介した「ダムナイ・ポー・アリー」は、東南アジアにおけるシーア派の展開に関する議論 (ex. Ronit 2015) に位置付けて、他地域の事例との比較、分析が期待できるであろう。マレー世界やジャワ世界に比べて研究が遅れているチャンパのイスラーム化の問題を進展させ、これらの地域の事例と比較する為にも、在地に残る古伝承は今後も着目されるべきであろう。

さらに、これらの古伝承が、現在の宗教実践においてイスラーム的な要素の影響が比較的顕著に見られるチャム・バニだけではなく、チャム・バラモンにも共有されている点にも着目する必要がある。本稿では紹介していないが、『チャムのサカライとダムナイ』所収の「サカライ・ポー・アロワツ (アラーの神話)」と呼ばれる物語は、チャム・バラモンの古老が継承する貝葉文書に書かれたものであり、アラビア語らしき文句があることから、著者のサカヤは、チャム・バラモンもイスラーム的な要素を受容した人々ではないかと推測している。チャム・バニとチャム・バラモンは宗教実践の面で違いがあるものの、「アワール・アヒエール」という象徴二元論な概念と、それに基づいて分類される信仰の対象を共有しており (吉本 2010)、サカヤの指摘は、そうした実状も踏まえて今後考察すべき点である。

以上のように、チャムの古伝承は様々な観点から分析し得る資料であるが、現時点では、これらの資料についての研究や報告はあまり多くはない。議論を精緻化していくために、まずはどのような内容の資料があるのか広く紹介していく必要がある。

#### <注>

- (1) チャム・バニの宗教施設。直訳すると「ムキ (マスジッド) の家」であるが、仏領期以降の報告や論文では単にマスジッドと訳されることが多い。一般的には各集落に1つ存在し、太陰暦第九月 (ラマダン) の期間に行われる礼拝や諸儀



- 礼をはじめ、チャム・バニの信仰における集落の中心的な場である。
- (2) チャム・バニの宗教職能者の一つ。アラビア文字由来のピニ文字 (Akhar Bini) で書かれたクルアーンの章句などが含まれる祈祷書の音読を学習し、ターン・ムキでの礼拝や葬送儀礼などの宗教儀礼を主導する。
- (3) ターン・ムキで礼拝が行われるのは、ラマダンの月や金曜日などである。ラマダンの間、集落のアチャルたちはターン・ムキに泊まり込んで寝食を共にするのだが、彼らの食事は、それぞれのアチャルの家族 (母, 妻, 妹, 娘ら) が自宅で調理し、サラウ (salau) と呼ばれる膳に乗せて、毎日決まった時間にターン・ムキまで運ぶことになっている。
- (4) カティップやムティンはターン・ムキを中心に形成されるアチャルの宗教組織の中のタイトル。前者はアラビア語のカーティブ、後者はムアッジンを語源とする。これらのタイトルには階梯が伴い、アチャルになった年数や祈祷文の朗唱を伴う礼拝の執行能力等に応じて、ムティン、カティップ (カティップ・タン), イマーム・タン, イマーム・パープルツ, ポー・グルーの順でのぼっていく。
- (5) ターン・ムキには、ポー・モハマツがジブラエルラツ (天使ガブリエルの転訛か) を生み出したと伝えられるカイ・ボン (gai bhong) が保管されている (Sakaya 2018: 37)。gai jruはこの異称であろう。なお、サカヤはカイ・ボンのベトナム語訳に gây thàn すなわち「神の杖」を当てているが、カイ・ボンの直訳は「赤い杖」で、その呼び名の通り全体が赤く塗られている。素材は沈香とされる。カイ・ボンは通常、ターン・ムキの西側の壁の中央にあるムンバル (imumbal) あるいはムロン (mraong) と呼ばれる、木の枠で囲まれた礼拝用の敷居の上部に、白い布で包まれた状態で保管されている。ラマダンの月に入ると降ろされ、布を外してムンバルに立てかけられた状態で置かれる。金曜礼拝などの際には、礼拝を主導するイマームがムンバルの中に

- 立ってこれを持ち、朗唱する。カイ・ボンはラマダン明けの朝には再び元の位置に戻されて保管されるが、ラマダンの月に集落内に死者が出なかった場合のみ、保管される前に、アチャルたちに担がれてターン・ムキの前庭を一周する。
- (6) ユアンとはベトナム語を話す人々。現在のベトナムでは民族的なマジョリティであるキン族を指す。
- (7) パセツはチャム・バラモンと呼ばれる宗教グループの宗教職能者。チャム社会において、アヒエールとはアワールという概念と共に用いられる概念で、男性、チャム・バラモン (「バラモン教徒」, 右, 太陽, 日中などはその象徴とされる。他方, 女性, チャム・バニ, 左, 月, 夜などはアヒエールの象徴とされる。これらを合わせた「アワール・アヒエール」という用語は、チャムの象徴二元論的な世界観を表す概念である。

#### <参考文献>

- Feeney, Michael., Formichi, Chiara. 2015. Debating 'Shi'ism' in the History of Muslim Southeast Asia, in *Shi'ism in South East Asia: Alid Piety and Sectarian Constructions*, pp.3-15, Hurst.
- チャンベトキーン (編)・本多守 (訳). 2001. 『ヴェトナム少数民族の神話—チャム族の口承文芸』, 明石書店。
- Ronit Ricci. 2015. Soldier and Son-in-law, Spreader of the Faith and Scribe: Representations of 'Ali in Javanese Literature, in *Shi'ism in South East Asia: Alid Piety and Sectarian Constructions*, pp.51-62, Hurst.
- Sakaya, 新江利彦. 2014. 「平成26年言語研修チャム語研修テキスト1 チャム語教程」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Sakaya (và nhóm cộng tác). 2014. 『Từ Điển Chăm-Việt-Anh, Việt-Chăm-Anh (Dictionary Cham-Vietnamese-English, Vietnamese-Cham-English)』, Nhà xuất bản Trí thức.
- Sakaya (và nhóm cộng tác). 2017. 『Từ Điển Chăm-

- Việt-Anh, Việt-Chăm-Anh (Dictionary Cham-Vietnamese-English, Vietnamese-Cham-English)],  
Nhà xuất bản Trí thức.
- Sakaya (Chủ biên). 2018. *Huyền Thoại Truyền Thuật Chăm*. Nhà Xuất bản Trí thức.
- Thành Phần. 2007. *Danh Mục Thư Tịch Chăm ở Việt Nam*. Nhà Xuất bản Trẻ.
- Yoshimoto Yasuko. 2012. A Study of the Hồi giáo Religion in Vietnam : with a Reference to Islamic religious Practices of Cham Bani, in Southeast Asian Studies. Kyoto University. Vol 1. No.3 : 483-505.
- 吉本康子. 2013. 「チャムの伝統文書にみるイスラーム的宗教知識 - ベトナム中南部のチャムが継承する写本及び目録の分析を通じた予備的考察」 『アジア文化研究所研究年報-二〇一三年-』 第四八号, 297-304頁, 東洋大学アジア文化研究所。

(客員研究員)

## Po Mohamat and Po Ali in Cham Mythology

YOSHIMOTO Yasuko

This paper discusses the legends of Po Ali and Awar Ahier contained in Sakaya's recent work *The Myths and Legends of the Cham people*, which was published in both Cham and Vietnamese. In the catalogue of the manuscripts that I examined in an earlier article, similar titles were found although no details were published there. Therefore, this paper primarily seeks to supplement the earlier article with accounts of these legends. This paper also examines how Islamic elements are represented in traditional Cham literature, which is shared between the two Cham religious groups in this region: Cham Bani and Cham Balamon. The names of Po Ali and Po Mohamat originated as names of the classical Islamic figures of Ali and Muhammad, who play the main characters in the legends. In this paper, I perform a preliminary examination of how the portrayal of these well-known figures reflects the local understanding of Islam.

Key words: Cham, Vietnam, mythology, Po Mohamat, Po Ali, Islam